超意味相と意味形成相（解釈）との乖離にかかる考察
蜂飼耳（2008）「ほたるいかに触る」の テクスト分析及び読者反応を通じて

秋　本　博　夫

Ⅰ．背景と目的

本稿においては、テクスト理論によるテクスト分析手法[1][2]を採用する。テクスト理論の領域は言語学・記号論から哲学・心理学まで広範にわたるが、作家史・歴史・政経・文化・哲学・心理学・倫理等のコードの入り口で分析を寸止めし、テクストの機能を考察するという点では共通している。このことは、テクスト理論の起点となったロシアフォルマリズムの主導者の一人シクロフスキーの下記理念に集約されるだろう。

（前略）しかし言葉はやはり影ではない。言葉には実体がある。（中略）わたしは、文学理論における内的な法則を研究している。紡績工場の場合で言えば、世界の綿花市場やトラスト政策ではなく、糸番号や糸の仕様・性能だけに関心がある。

ヴィクトル・シクロフスキー（1929）散文の理論について、フェデラーツィア出版モスクワの前書き（Предисловие, Виктор Шкловский, О теории прозы, издательство «Федерация» Москва-1929）

ロシアフォルマリズム[3]は、「日常言語」と「詩的言語（非日常言語）」の二元論を主軸としおり、日常言語を詩的言語化するために異化、引き延ばし、同語反復等の文学テクストの特性を明らかにした。もちろんロシアフォルマリズム以前及び同時期の言語学においても、ソシュールの「ラング」と「パロール」、エルドマンの「事象表象」と「意味表象」、ポテブニャの「意味」と「表象」、パウルの「慣用的」と「臨時的」等の二元論が主流である。しかし、それらの殆どは説明可能な意味の相（意味形成相）での考察・分類となっており、解釈を拒む説明不能な「詩的言語（非日常言語）」「超意味言語」の領域にはじめてアプローチしたのはロシアフォルマリズムと言ってもよいだろう。

稿者は、ロシアフォルマリズムの概念・理論を手法化・応用するため、説明（解釈）可能な領域と説明（解釈）不能な領域にテクストを分相している。これは「日

常言語」と「詩的言語（非日常言語)」という概念と完全には一致しないが、方向感は共有できている。その方向感とは、読者が文学テクストに対峙する時、葉書一枚に圧縮できる解釈・テーマ（意味形成相）のみならず、説明不能なテクストの詩性・空気・ダークマターのようなもの（超意味相）の存在を看過できないという点である。

今般、文学テクストにおける超意味相が読者を引き寄せる機能を果たしている一方で、その超意味相が意味形成相と乖離している複数例を確認できた。本稿では、まず蜂飼耳 2008「ほたるいかに触る」のテクスト分析を行い、検証の座標を明確にした上で、読者反応を詳察していきたい。

Ⅱ.「ほたるいかに触る」のテクスト分析

1. テクスト

短編小説「ほたるいかに触る」(1251 字、蜂飼耳、2008 発表、something7、鈴木ユリイカ）を底本とする。

2. テクスト分析手法

二項対立は解釈において大きな機能を果たす。その手法は有力なロシアフォルマリストのヤコブソン、シクロフスキーら [3] によって積極的に採用された。本稿では、コードを受容し、解釈・テーマ構成の基盤となる二項対立の最小単位（対立基 [4]）を可能な限り抽出し、テクストを網羅的に地図化・可視化する手法 [1] [2] を採用した。

超意味相は、同語反復、背景描写、部分描写、異化、空所・不確定箇所、多層化としてテクスト中表出してくる。1251 字に過ぎない「ほたるいかに触る」は、意味形成相と超意味相の表記・外形上の識別が比較的容易であり、読者反応を考察する上で適切な材料であると判断した。

3.「ほたるいかに触る」の意味形成相（受容相 [5]）～ファーブラとシュジェート [6] ～

最も大きな二項対立の単位（対立原基）[4] を探すには、テクストの時間軸全てを網羅するあらすじを特定する必要がある。なぜならテクストの総時間の中に、テクストを通時的に支配する差異（対立基）が内包されているからである。

本テクストのファーブラは下記の通りである。すべて時系列で叙述されており、ファーブラとシュジェートは一致している。

①叔父が死ぬ
②叔父が死んだ近い時期に、叔父の住んでいた町の近くの展示場で、語り手がほたるいかに触る

③手の中のほたるいかの鼓動から、ほたるいかがとてつもない恐怖を感じているのが語り手にわかる
④「食べないでください」という注意書きを語り手が見つける
⑤いきいきと黒いまばたきしないほたるいかの眼に見られていると語り手は確信するが、ほたるいかに逃げ場所はない
⑥ほたるいかを眺めていても語り手に食欲は湧かない
⑦海を見ながら、水の下でほたるいかの群れを含むあらゆるものが黙って消えていくのだと語り手が思う

4. 意味形成相（受容相[5]）～対立基と等価物[4]～

解釈基盤となる対立基（対立原基・従属対立基）と等価物は下記の通りである。テクスト中表記されていない反対項は、稿者が括弧内に補記した。

【対立原基】
①ほたるいかに触る×（ほたるいかに触らない）
②生×死
【従属対立基（×）と等価物（≒）】
③叔父≒ほたるいか
④浜辺≒海×展示場≒ふれても構わないコーナー
⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている≒やがて疲れて、死んでしまう
⑥頭を上げ（上）×水に手を入れた（下）［≒冷たい水に両手を浸した］
⑦食べないでください×刺身として食す
⑧動く×動かない［≒浜の身投げ］
⑨眼がいい≒いきいきと黒い≒青い光を流す
⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない
⑪把握している×（把握していない）
⑫食欲は湧かない×食べてみようと思う人

5. 意味形成相（解釈相）～転位・転写[7]と解釈例～

テクスト中の対立基や等価物を転位・転写（読み替え）することにより、解釈が行われる。予想される解釈例を下記に挙げた。

1）本稿Ⅱ４②③⑦⑩⑪「生×死・叔父≒ほたるいか」「食べないでください×刺身として食す」「囚われの身≒もうどこへも行かれない」「把握している×（把握していない）」→（転位・転写）→不条理×公正
解釈例：人間もホタルイカ等他の生物同様、理不尽な現実の中で何の理解・抵抗

もできないまま生まれ死んでいく。

2）本稿Ⅱ４⑤⑦⑨⑩「金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている≒やがて疲れて、死んでしまう」「食べないでください×刺身として食す」「眼がいい≒いきいきと黒い≒青い光を流す」「囚われの身≒もうどこへも行かれない」→（転位・転写）→残酷な人間×残酷でない人間
解釈例：殺生なしに存在し続けることができない。存在することの残酷さ。死を運命づけられた生命の妙なる輝き。

6. 超意味相（背景描写）

本テクスト後半に阻害素[1]の一つである背景描写が二箇所登場する（下記①②）。「最も印象に残った言葉・表現」として、下記①②を挙げた読者（Ⅲ．1．参照）は85名中32名（38%）で最多であった。

①【超意味相として機能する背景描写と異化の混合物】冷たい水に両手を浸したまま、心だけ後退する。詩に似た影が足元に留まる。

②【意味形成相に従属する背景描写】おもてへ出ると、海はもう目の前。空は曇り、波は静かだった。船も見えず、鳥もいない。この水の下に、ほたるいかの群れが。あらゆるものが、黙って、消えていく。

表現①は、背景描写と異化の混合物である。テーマ構成に繋がる対立基を殆ど含んでおらず、意味形成相にとっては唐突感のある余分な表現に過ぎない。本稿Ⅱ４⑥「頭を上げ（上）×水に手を入れた（下）≒冷たい水に両手を浸した」という上下対立や音韻上「詩≒死」という転位・転写が不可能とは言えないが、解釈基盤としては不十分感が否めない。実際、今般の読者反応にこのような転位・転写例はなかった。

表現②は一つ背景描写（超意味相）ではあるが、「消えていく」（「死」と等価）[8]によって対立原基「生×死」と繋がっていくので、意味形成相に従属し、純粋な阻害素[1]（超意味相）とは言えない背景描写と言える。

Ⅲ．読者による超意味相の抽出と解釈の分析

1. 読者

梅光学院大学2020年度前期初年次必修科目「日本の文学」（2020年5月11日）において、蜂飼耳「ほたるいかに触る」を学生85名が読み、「最も印象に残った言葉・表現」の抽出及び「解釈」を行った。設問は次の通りである。回答は、マイクロソフト社Formsを用い、授業翌日23：00までに回収した。

①「ほたるいかに触る」を読み、最も印象に残った言葉・表現を挙げてください。
②「ほたるいかに触る」のあなたの解釈を 200 字以内で記入してください。

2. 超意味相の抽出例と解釈例

本稿Ⅱ 6 ①超意味相として機能する背景描写と異化の混合物超意味相「冷たい水に両手を浸したまま、心だけ後退する。詩に似た影が足元に留まる。」を「印象に残った言葉・表現」として挙げた読者は 85 名中 18 名（21%）であった。各解釈の基盤となっている対立基や等価物（本稿Ⅱ 4 において整理し番号を付けたもの)、転位・転写等稿者注記を括弧内に付し、学籍番号順に列挙した。また、誤表記をあえて修正せず、エビデンス価値の毀損を避けた。

(1)「ほたるいかに触る」の私の解釈は、かつては海の闇の中で青く光っていたほたるいかが、今では展示場という闇の中で生の光を放っているというものです。そのほたるいかの姿が、生と死の両方をみせているのではないかと思いました。(注：②生×死、転位・転写なし)

(2) 私は「ほたるいかに触る」を「向き合えない気持ち」と解釈しました。語り手は「叔父が死んだ」までの心を文面に表記することまではできても、そのあと、叔父自身と「私」に触れた言葉を描くことが難しかったのではないかと思いました。けれどほたるいかを間に挟んでそっちに向き合うことで、さみしい思いを形にしたのではないかと思いました。(注：②生×死→転位・転写→さみしくない×さみしい)

(3)「ほたるいかに触る」の私の解釈は、主人公から見た生前の叔父の様子というものです。なぜこの解釈に至ったかというと、ふれて構わないコーナーに囚われもうどこにも行くことのできないほたるいかが、もう治ることのない病にかかった叔父という風に考えられたからです。「食べないでください」という注意書きは、ほたるいかが書いたものではないですが、どうせここで死ぬんだから殺さないでくださいというほたるいかの心の叫びと、これ以上治療で苦しみたくないという叔父の気持ちという意味に感じられました。「知らない生きものの手に追われたり、握られたり」はお医者さんや看護師さん、昼間の展示場は、昼間でお見舞いに来る人が少ない病院だと解釈しました。(注：②生×死、⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない→転位・転写→殺さない×殺す、苦しまない×苦しむ、展示場≒病院)

(4)『ほたるいかに触る』の私の解釈は、生殺与奪の権利を人間に掌握されたほたるいかを、自分の身に置き換えているというものだ。人間は身近な死に触れた直

後、生とはちっぽけなほたるいかのような物だと自覚する。その一方、生とは有限で尊いものだとうち震える。時間が経てばそれを忘れ、また思い出しを繰り返す。人間の脳は現金に出来ている。それを際立たせるため、「叔父が死んだ」という冒頭が必要だったのだと考える。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない→転位・転写→思い出す×忘れる)

(5)「ほたるいかに触る」の私の解釈は、ほたるいかたちは囚われの身として展示場の中で死んでいくが、心だけ後退するという表現から、作者の創り出した詩は社会の中でとらわれることになったとしても、作者自身にしか変えることが出来ないということなのではないかと思いました。(注：超意味相を意味形成相に組み入れようとしているが、意味形成相において「自律×他律」の対立基はなく、解釈に失敗している。)

(6) 私は「ほたるいかに触る」を蜂飼耳の他人に対する心を表したものだと解釈した。
(注：超意味相を意味形成相に組み入れようとしているが、意味形成相には「自分×他人」の対立基はなく、解釈に失敗している。)

(7) 私は「ほたるいかに触る」を、命の重さに生物の種類は関係ない という訴えだと解釈しました。冒頭で 人間である叔父の死を告げ、その直後にほたるいかの話題を提示していること、囚われの身であるほたるいかの立場を案じていることから このように思いました。走った後の鼓動や速い脈といった 命を想像させるような単語が使われているのも印象的でした。(注：③叔父≒ほたるいか、⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない→転位・転写→命の平等×命の格差等)

(8) 私の「ほたるいかに触る」の解釈とは、「極小の狂気」です。好奇心のような、実際にその衝動に従ってしまうと、後で「魔が差してしまった」と釈明してしまうような、そんな感情を表していると思います。「ここで食べ〜だろうか。」(注：原文では、「ここで、食べてみようと思い立つ人がいるとしても、おかしくはない。とはいえ、醤油もなにもつけずに、食べる気になるだろうか。」) の部分では、社会的常識の観点で考えていないことから、作者は直近の様々な出来事の影響で、少しおかしくなっていたのでしょう。その狂気は、展示場のおもてに出た時に消え去ったのだと思いました。(注：⑦食べないでください×刺身として食す、⑫食欲は湧かない×食べてみようと思う人→転位・転写→食べない正気×食べる狂気)

(9)「ほたるいかに触る」の私の解釈は、ほたるいかを叔父の死と重ねて書いてあるものだと感じました。前半の部分では叔父の死について触れていたけれど、後

半にかけて展示場にいるほたるいかも不自由な中で生きているというのが書かれており、人間の命も動物の命も儚く脆いものというものです。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか→転位・転写→命の重さ×命の儚さ)

(10) 私は「ほたるいかに触る」を、叔父の死とほたるいかの死を遠回しに結びつけていると解釈しました。「食べないでください」に続く言葉が、「そう書いてあった」から「言葉は告げる」に変化しているため、ほたるいかが自分のことのように思え、ほたるいかが姿を消すのに合わせて叔父も入水したのではないかと考えました。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑧動かない［≒浜の身投げ］×動く→転位・転写→入水しない×入水する)

(11) 私のほたるいかに触るの解釈は、作者が初めに叔父の死について話していることから、生と死に関しての話だと思いました。常日頃何も思うことなく見ていたほたるいかを見つけ、さらには水槽の近くにある「食べないでください。」という張り紙、そして死んでいたほたるいかと同じ水槽でいきいきとした目のほたるいかの対比が生と死を言外に伝えているような気がしました。(注：②生×死、⑨眼がいい≒いきいきと黒い≒青い光を流す、転位・転写なし)

(12) 私は、「ほたるいかに触る」を生命のはかなさや小ささという意味に解釈しました。祖父の死と同じ時期に経験したほたるいかに触れること、はじめは全く関係のない別の話だと思いましたが、読み進めていくと祖父の死と人間がほたるいかを食べる行為から「命」という面で二つの話が共通していると思ったからです。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、転位・転写なし)

(13) 私は「ほたるいかに触る」を叔父の死をほたるいかで表したものだと解釈しました。叔父はほたるいかが多くの人に触られ弱って死んでいくように、社会での多くの出来事に疲れ弱り果てて死んでしまったのではないかとかんがえます。また、本文にほたるいかの身投げとあるので、叔父は身投げをして死んでしまったのではないか、とも、解釈しました。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑧動かない［≒浜の身投げ］×動く→転位・転写→自殺しない×自殺する)

(14) ほたるいかに触るを大切なものに触れると解釈しました。(注：③叔父≒ほたるいか→転位・転写→大切なものに触れる×大切なものに触れない)

(15) 私は「ほたるいかに触る」をうつ病という意味に解釈しました。最初から最後までなんだかどんよりとした薄暗い文章に感じとても悲しい気持ちになりました。「食べないでください」は「助けてください」、食べる食べられるは自分以外

の全ての死、のように例えて読みました。叔父が亡くなったショックでうつを患った方で、最後の段落でその方は亡くなったと思いました。（注：②生×死、⑧動かない［≒浜の身投げ］×動く→転位・転写→うつ≒自殺）

（16）私は「ホタルイカに触る」を叔父が死んだというのとホタルイカに触ったというのが近い時期の出来事だったと言っているので叔父の死因はイカを触っている場面の一文のように疲れて死んでしまったんじゃないかと解釈しました。（注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている＝やがて疲れて、死んでしまう、⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない、転位・転写なし）

（17）私は「ほたるいかに触る」を 生と死は隣り合わせ 小さかろうが大きかろうが弱かろうが強かろうが死ということは変わらない という意味に解釈しました。（注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、転位・転写なし）

（18）人間という立場である程度の自由を与えられながらも死んだ叔父と、狭い展示場・人間の手の中で自由を奪われながらも懸命に生きるほたるいかを対の立場でえがいていると感じた。後者の中でも死んでいくほたるいかは、自由もなく生涯を終えるのでとても悲しかった。同じ生き物でも人間とほたるいかの全く反対の生き方・立場を感じて、考えさせられる文章だなと思った。（注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない→転位・転写→人間の自由×ほたるいかの不自由）

3. 超意味相と意味形成相（解釈）の乖離

稿者注記の通り、本稿Ⅲ 2（5）（6）の解釈をした読者は、本稿Ⅱ 6 ①の超意味相に該当する箇所を意味形成相に組み入れ解釈しようとしているが、成功していない。（5）（6）を除くと（1）～（18）まですべて本稿Ⅱ 6 ①超意味相として機能する背景描写と異化の混合物とは関係しない解釈をしているのがわかる。「最も印象に残った言葉・表現」（超意味相）と解釈（意味形成相）の明らかな乖離が確認できる。

4. 意味形成相の抽出例と解釈例

前述Ⅱ 6 ②意味形成相に従属する背景描写「おもてへ出ると、海はもう目の前。空は曇り、波は静かだった。船も見えず、鳥もいない。この水の下に、ほたるいかの群れが。あらゆるものが、黙って、消えていく。」を「印象に残った言葉・表現」として挙げた読者は 85 名中 14 名（17%）であった。各解釈の基盤となっている対立基や等価物（本稿Ⅱ 4 において整理し番号を付けたもの）、転位・転写等

稿者注記を括弧内に付し、学籍番号順に列挙した。また、誤表記をあえて修正せず、エビデンス価値の毀損を避けた。

(1) 私は、この文章を読んで、「ほたるいか」と「亡くなった叔父」の姿を重ねているのではないかと考えました。主人公がほたるいかに触れて生と死を直に感じた様子が生々しく書かれていたからです。本文中では叔父の話は一行目以来出てきていませんが、それ以降の「ほたるいか」の描写で“死”というものの怖さ、突然さ、あっけなさが伝わってきました。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、転位・転写なし)

(2)「ほたるいかに触る」の私の解釈は、自分達人間は展示場にいるほたるいかの様に疲れ果てて死んでしまうということです。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている＝やがて疲れて、死んでしまう、転位・転写なし)

(3) 展示場に置かれ、触れられて衰弱死していくホタルイカの姿と死んだ叔父の姿を重ねているように考えました。また、叔父の死についてはあっさりと書かれている反面、生きているホタルイカについては触覚や視覚から得られる情報を事細かに書いているため、「ほたるいかに触る」について生と死について問いかけている作品だと解釈しました。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている＝やがて疲れて、死んでしまう、転位・転写なし)

(4)「ほたるいかに触る」の私の解釈は一見自由に見える世界でも実際は何かしら管理されているというものです。(注：⑩囚われの身≒もうどこへも行かれない、⑪把握している×（把握していない）→転位・転写→自由×管理・監視社会)

(5) 私の解釈は人間の非道な一面です。なぜこのように思ったか、それはほたるいかにふれても構わない場所で、その小さな体を握られたり、中には食したりと人の勝手な理由で虐げられているようにも見えるからです。作者もひどいとはわかっていても夢中で触っていると記してありました。これは推測ですが叔父も人の勝手な理由が原因で、小さな命のほたるいかのように命を弄ばれ死んでしまったのではないかと思いました（注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている＝やがて疲れて、死んでしまう、転位・転写なし)

(6) 私は「ほたるいかに触る」を生と死、食べる食べないを結び付けて書いたも

のではないかと思う。最後の「空は曇り、波は静かだった」と「あらゆるものが、黙って、消えていく」の二か所がとくに生と死について書かれているのではないかと思う。ほたるいかも生き物なのだから人間にたくさん触られると弱り死ぬ。自然界にひっそり生きていても浜に身投げされ弱り死ぬ。一つしかない命をどちらで過すか、どのように最後を迎えるかを描写したものだと解釈した。(注:②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑦食べないでください×刺身として食す→転位・転写→自然の中での死に方×文明の中での死に方)

(7) 私は主人公が、死んだ叔父と展示場に囚われて触られて疲れて死んでいくほたるいかを重ねているのではないかと解釈しました。(注:②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている=やがて疲れて、死んでしまう、転位・転写なし)

(8) 私は「ほたるいかに触る」を、ほたるいかという小さな命と叔父の死を通して生と死について考えるという意味に解釈しました。そして、命の儚さについて伝わると思いました。(注:②生×死、③叔父≒ほたるいか、転位・転写なし)

(9) 私は「ほたるいかに触る」を生と死、また命の尊さを意味していると解釈しました。亡くなった叔父さんとは対照的に力強く脈打つほたるいかに触れると、命があるということを手で感じ、触ることにさえ気が引けたのではないかと感じました。主人公は叔父さんを失った現実をほたるいかに触れることで余計に実感したのではないかと推測しました。(注:②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑤金魚≒脈打つ≒とてつもない危機≒ひどいことをしている=やがて疲れて、死んでしまう、転位・転写なし)

(10) 私は「ほたるいかに触る」をすべての生き物の一生という意味に解釈しました。(注:②生×死、③叔父≒ほたるいか、転位・転写なし)

(11)「ほたるいかに触る」を読んで私は、命の循環という意味に解釈しました。
叔父の死とほたるいかの一生に触れあう体験が近い時期に起こり、その二つの出来事を同じ時期に経験することによって、人も動物も死んだら生まれる。全ての生き物の生と死は続いていくんだ。ということを筆者自身が肌で感じとることができ、それを命の循環にという意味でとらえたのではないかと解釈しました。(注:②生×死、③叔父≒ほたるいか→転位・転写→命の一回性×命の循環)

(12) ほたるいかと叔父は何か繋がっていると思いました。(注:③叔父≒ほたるいか、転位・転写なし)

(13) 私は「ほたるいかに触る」を、ほたるいかも人間と同じ感情があり、食べられることに対しても恐怖を感じて、生きたいという気持ちがいっぱいあるように見えました。そして、「あらゆるものが、黙って、消えていく。」という最後の文章でほたるいかに限らず、すべての生き物たちが同じ思いをしているから、その気持ちを忘れないでという意味に解釈しました。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか→転位・転写→動物にもある尊厳×動物機械論)

(14) 私の解釈は祖父への死をホタルイカに関連させているだ。ホタルイカの説明で繰り返し触られて疲れて死んでしまうこれは祖父の老化を表しておりまた、眼がいいという表現は祖父は賢かったということだ。確信的なのは「食べないでください」という表現でこれは「死なないでください」という祖父へのメッセージと読み取れる。これは当たり前だと思っていたが「食べないでください」と忠告しておかないと誰かが食べてしまうのかもしない、祖父に「死なないでください」と言わないと死んでしまうのかもしれないと捉えたのだと考える。そして最後の文の「あらゆるものが」のあらゆるものに静かに文字には海や鳥などしか記載してないが何も言えずに消えてしまった祖父も含まれていると解釈した。(注：②生×死、③叔父≒ほたるいか、⑦食べないでください×刺身として食す、⑨眼がいい≒いきいきと黒い≒青い光を流す、転位・転写なし)

5. 意味形成相と解釈の整合性

本稿Ⅲ2超意味相の抽出・解釈例と異なり、解釈に失敗している例はなく、14例すべて本稿Ⅱ4の対立基と結合し、解釈に至っている。(4)(12)の読者を除き、「(消えない)×消えていく」と等価にある「生×死」を解釈基盤にしている。(4)では「自由×管理・監視社会」が「生×死」と等価にあり、(12)では「消えていく」が「ほたるいか」「すべてのもの」「叔父」と等価にあることを考慮すると、解釈が本稿Ⅱ6②意味形成相に従属する背景描写と同期していると言える。これは、論説文・商業文等の主張的・実用的テクストにおいてなされる読書行為に類似している。つまり、テクスト中無駄で余分な箇所があっても、それにコードを突き刺し、意味形成(テーマ構成)の幹(大黒柱)や枝葉(支柱)をテクスト中に張り巡らせようとするものである。

また、転位・転写しなかった読者が、10名(71%)であり、本稿Ⅲ2(超意味相の抽出・解釈例)の読者5名(28%)に比し、3.38倍となっている。本稿Ⅱ6①超意味相として機能する背景描写と異化の混合物を挙げた本稿Ⅲ2の読者の方が、本稿Ⅱ6②意味形成相に従属する背景描写を挙げた本稿Ⅲ3の読者よりも転位・転写に意欲的だと言えるだろう。転位・転写の能力に優れ、メタファーを重ね塗りしていくにしたがい、説明不能な非コード領域に突き抜けていこうとする

のは容易に推測できる。

Ⅳ．本稿のまとめ

本稿Ⅱ６①超意味相として機能する背景描写と異化の混合物は、明らかに解釈に寄与していない唐突な言葉・表現である。しかし、85名中18名（21%）がそれを「印象に残った言葉・表現」として挙げた。そして彼らは、解釈に失敗した2名を除き、超意味相と乖離した意味形成相において解釈を行っていることがわかった。つまり、解釈に役立たない箇所、あるいはそれに積極的に参加しない箇所、さらには解釈を阻害する箇所に引き寄せられる読者群がいるということになる。

稿者は、文学テクストは制限された語彙・表現手段に閉じこめられたメタファーの成果物・発話行為（語れないことを語る仕組み）だと確信している。それで文学テクストは、一定の強い意味形成相の安定化・固定化を嫌い、読者・時代・環境が変わる都度、解釈やポジションが変遷していくようなシステムになっているのではないかと考えている。解釈・テーマ構成とは、文学テクストという終わりのない螺旋階段の踊り場のようなものかもしれない。そのようなテクストの代謝機能は、超意味相が果たしているものと類推するが、この論証には、古典作品等同一テクストに対する解釈（意味形成相）の変遷と超意味相に対する評価の変遷を慎重に数百年のスケールで定点観測する必要がある。

文学研究・言語学・テクスト理論領域において、説明不能な非コード領域に向かう超意味相そのものについて論じられることは意外に少ない。しかし、看護学の領域においてはロラン・バルトの「第三の意味」（意味の形成性）が積極的に参照されている場合がある。そこでは、学内学習をバルトの第一の意味（情報のレベル）、臨地実習を第二の意味（象徴のレベル）、理論化・体系化の困難な臨地実習における「越境知」「異なる時間的展望同士が交差・衝突し変化する過程」を「第三の意味」としている。[9]

テクスト分析の場合、転位・転写のない読解（テクストの言葉そのもの、本稿Ⅱ４、意味形成相の受容相[5]）は第一の意味、転位・転写させた解釈（読み替えたもの、本稿Ⅱ５、意味形成相の解釈相[5]）は第二の意味、超意味相（本稿Ⅱ６①）は第三の意味に相当するであろう。超意味相は看護学と同様手順化・教科書化できない非コード領域であり、意味形成相と次元を画している。このように対立基（コードを受容する解釈基盤）[4]が内包されておらず、真空状態での自然発生的な感性・思考・行為が超意味相において可能となる文学テクストの機能は、コード受容性が高く一意に向かう論理的・主張的言説の機能に鋭く相反していると言えるだろう。今般、文学テクストのこの機能に21%の読者群が気づき指摘したのは特筆すべきことである。人体のDNAの98%を占めるジャンクDNA（非コード領域）のように、超意味相の不可解で秘密めいた機能が明らかになるにつれ、知のジャンクDNAの宝物庫のような文学テクストの姿が徐々に浮かび上がってくる

だろう。それは、将来における環境・コード・価値観の変化やパラダイムシフトを見越したしなやかで美しい受容体になっているものと予想している。

付記

本邦では、テクスト理論の紹介はされているが、研究実績は少ない。テクスト理論は、建築に例えれば基礎工事や土木工事、あるいは強度計算に相当するだろう。医学では解剖学・法医学領域であろう。壮麗な建造物やデザインと対置されることもあり、作者・歴史・政経・文化・哲学・心理学コードを主軸にした文学研究に対峙するものとして、時に毛嫌いされることもある。とは言え、実は壮麗で読者の関心を最も引く文学研究と垂直に繋がっており、二項対立を軸にした文章読解・表現系授業やプログラミング教育という方向に若干の汎用性もある。この点を即座に見抜き、本学会に招聘下さった倉本会長に衷心より敬意と謝意を表したい。

注

[1] 稿者テクスト分析の概要

ロシアフォルマリズムと受容論をかけ合わせ、構造主義と脱構築（再構築）が併在しているとする稿者理論に基づいた分析手法。テクストを寓話・教訓的な強いテーマ構成に向かう意味形成相（「良×悪」という二項対立）と、意味形成相を阻害することにより説明できない領域（超意味・超メタファー）に向かおうとする超意味相に分相。テクストは、比較的分かり易い意味形成相上の意味（解釈）と、超意味相による意味形成相の阻害の結果生じる『意味の形成性』との間で振幅するものと捉える。具体的には、同語反復、背景描写、部分描写、異化、空所・不確定箇所、多層化６種の阻害素が、意味形成相を阻害し超意味相への突入口となる。

[2] 稿者テクスト分析の手法

二項対立の最小単位・モチーフであり、解釈基盤となる対立基の抽出から開始する。まず、あらすじを叙述順（シュジェート）から時系列（ファーブラ）[6]に並べ替え、テクストの総時間を支配する広範な二項対立（対立原基）を特定する。テクスト中に散逸し、対立原基に従属することの多い中小の二項対立（従属対立基）を抽出・棚卸する。棚卸した対立基を解釈基盤とし、転位・転写［7］を経て想定される解釈を形成する。その後、意味形成相と対峙する超意味相の具体的機能（阻害素）である同語反復、背景描写、部分描写、異化、空所・不確定箇所、多層化を特定する。

[3] ロシアフォルマリズム

サンクトペテルブルグ・レニングラード（詩的言語研究会　シクロフスキー、トマシェフスキー、トゥイニャーノフ、エイヘンバウム等)、モスクワ（言語学サークル　トルベツコイ、ヤコブソン等）にてテクスト理論の先駆けとなった研究・創作活動。文学テクスト固有の詩性・非日常性を言葉の秩序の中に体系化した。シクロフスキーの概念化した『異化』、ヤコブソンの『二項対立』は今日世界的に定着している。ロシアフォルマリストは、マヤコフスキー、フレー

ブニコフ等の革命詩人とも協働し、超意味言語（ザーウム заумный язык）を概念化・実用化し、実験的詩、小説を多く残している。しかし、ロシア革命後の社会主義体制下、イデオロギー批評という単一コードに馴染まないロシアフォルマリズムは抑圧されるようになった。

[4] 対立基に関する補足

対立原基：作品を通時的に網羅する広く大きな対立基（例えば、恋愛小説の場合は、恋愛の成就×破綻)。対立原基が有力な解釈基盤という訳ではなく、それは網羅する範囲が広いため大抵水ぶくれしている。対立原基に従属しその軒下を借りながら通時的に動き回ることのできる微細な対立基が、強い解釈基盤になる場合が多い。例えば、推理小説における犯人特定に繋がる証拠等。

従属対立基：対立原基に従属する対立基。従属せず捻じれていたり、孤立していたりするものもあるが、それは超意味相（空所・不確定箇所）に組み入れられる。

等価物：ロシアフォルマリズムの用語。等価関係にある言葉・表現。テクストは対立と等価によって、対立基の各項がグループ化、肥大化していく。

[5] 受容相と解釈相

意味形成相は受容相と解釈相の総和である。

受容相：対立基（対立原基＋従属対立基)。テクストの言葉・表現を読み替えなしにそのまま対立関係に整理したもの。量販店に例えれば、食材の品揃え。

解釈相：多様なコンテクストや規範、価値観、知見、思想等によって、テクストの言葉・表現からなる受容相から転位・転写（読み替え）を経て、強い意味・テーマ構成に向かう相。量販店で仕入れた食材の調理。

[6] シュジェートとファーブラ

シュジェートは叙述順のあらすじであり、ファーブラは時系列に鋳直しあらすじ。どちらもロシアフォルマリズムの用語である。シュジェートを複雑化することで、引き延ばし（知覚の遅滞）や空所・不確定箇所の効果等が得られやすくなる。

[7] 転位・転写

テクストの言葉の辞書レベルの意味（受容相）を何らかの象徴であるとし、読み替えていく行為（解釈相)。例えば、「赤信号」は「止まれ」と読み替えられる。様々なコンテクストや規範・コードが転位・転写の原動力となる。

[8] 出典

広辞苑第七版（2018）岩波書店、及び大辞泉大二版（2012）小学館において「消える＝死ぬ」

[9] 出典

香川秀太（2012）看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達—学内学習－臨地実習間の緊張関係への状況論的アプローチ—、教育心理学研究 60 巻（2012）2 号

参考文献

ロマン・ヤコブソン　川本茂雄他訳（1973）一般言語学、みすず書房
ロマン・ヤコブソン（1987）詩学の研究、プログレス（Роман Якобсон, Работы по поэтике, Прогресс-1987）
アレクサンドル・ポテブニャ（1892）、思考と言語、サンクトペテルブルク（Александр Потебня, Мысль и язык, СПб, 1892）
フェルディナン・ド・ソシュール　小林英夫訳（1972）、一般言語学講義、岩波書店
ヴォルフガング・イーザー　轡田 收訳（2005）行為としての読書 美的作用の理論、岩波モダンクラシックス
ノーシロップ・フライ　海老根宏他訳（1980）批評の解剖、法政大学出版局
水野忠夫（1985）詩的言語とは何か、せりか書房
秋本博夫（2010）散文（小説）の基本構造とチェーホフ、レーヴック
ロラン・バルト　沢崎浩平訳（1998）第三の意味、みすず書房
ロラン・バルト　鈴村和成訳（2017）テクストの楽しみ、みすず書房
山元隆春（2016）文学教育基礎論の構築、渓水社

秋本　博夫（あきもとひろお）会員